

セレスタン・フレネ（著） 里見実（訳）  
『言語の自然な学び方—学校教育の轍の外で—』

2015年 太郎次郎社エディタス A5判 285頁 定価（本体3,500円＋税）

森 志津\*

本書は、セレスタン・フレネ Freinet, C (1896-1966) の言語学習に関する4つの文章を、著者の没後に、娘のマドレーヌ・フレネ Freinet, M によって集成・刊行された『Méthode naturelle de lecture』を里見実が、訳したものである。フレネは、フランスの辺境の村の子どもたちの現実の生活に立脚し教育実践を構想した人物である。この4つの文章は、序論、第1部、第2部、第3部として構成されている。序論は、里見が、結語としての位置づけの可能性を述べているように、フレネの中心的理念の一つである実験的模索（tâtonnement expérimental）について取り上げている。第1部では、フレネの娘の豊富な幼年期の資料とフレネ自身の鋭い洞察による観察記録に依拠し、子どもの言語習得のプロセスを明らかにしていく。第2部では、古い規律訓練型教育と自由新教育との相克について述べ、結局は手作りの実践を続けていくより他はないという提言を行う。第3部では、言語学習における文法の学習が不可欠ではないという見解を示し、言葉に深く馴染んでいく鍵となるべく具体的方策について言及する。里見によれば、第1部は、おそらく1940年代に書かれ（出版は1968年）、第2部と第3部は、1960年代に書かれた（出版は、1970、1973年）ものであるという。本書は、異なる時代に書かれたそれぞれの文章が、相補的にフレネ理論を補強し、より理解を深めやすい構成となっている。全体を通して、当時の伝統的な教育のあり方からの脱却を目指したフレネの革新的取り組みを余すことなく紹介している。

まず序論（pp.9-36）では、フレネの教育実践の土台になっている実験的模索について述べている。偶然に依拠した行動、或はうまくいった経験を固定化する心理機制である試行錯誤に比して、実験的模索には、経験の透過可能性（perméabilité à l'expérience）があるという。つまり、人間の行動には、とるべき方向やたどるべき道すじなど絶対条件があらかじめ設定されているわけではなく、指令もない。数かずの障害がうまく乗り越える行動に向けて生命を導く。成功した行動は路を広げ、突き進む。こうして子どもは、基本的なからだの所作を身につけていく、というのである。知能も技術も、この手探りの模索というプロセスのなかでのみ習得されるという。フレネは、この手探りの模索のことを実験的模索と呼んでいる。

第1部「言語学習における自然方式」（pp.37-179）では、フレネの娘バルの1歳8ヵ月～6歳6ヵ月の5年間における読み書きの世界への接近の様子が、丹念に示されている。バルは、いたずら描きの描線表記から始まって、自己流に当たりをつけながら、読み書きを習得していく。その自己流に当たりをつけることを大事にするのが、本書の題名にもある自然な学び方に相当し、これを自然方式と呼ぶ。この自然方式は、子どもの生の統合、つまり、学校と子どもの生活環境との乖離を埋めていくことを求める。

では、自然方式では、どのように読み書きが習得されていくのかについて、バルの実記録を辿る。バルは、手を開いて洗面器の水をパチャパチャしたり、指にインクをひたして一振りするなど、からだを動かして力試しをするのが好きな子どもである。1歳8ヵ月の時、ごちゃごちゃと線を引くという線描表記（落書き）を手に入れる。その後、垂直な線、円、波線など、もくもくと取り組み、成功した試みは再生産し、うまくいかなかった試みは、見捨て、結果に照らして良いやり方を選んでいく。2歳1ヵ月には、あるかたちを描きながら、「これお家だよ」と説明するようになる。要素を描き加えていき、筋道を説明したり、描き間違えも絵を手直しして説明し、事後的説明をするようになる。デッサンで物語ることをしているのである。4歳になると、要素を繰り返し描く。すると偶然の所産で、また新しい要素が併置される。そし

\* お茶の水女子大学大学院博士後期課程

て、その諸要素の関係を事後的に説明する。ここでフレネは、デッサンについて、子どもの創造の手段は、口で言うことやからだで示すこと、身振りで真似ることなど数多くあり、デッサンは、そのレパートリーの一つに過ぎない。しかし、子どもが読み書き行為に近づいていくときの不可欠な踏み台であるという。デッサンを続けるうちに、親の書くサインに気づいたバルは、絵を描いた後、署名を始める。記号めいたものが書かれ、エクリチュール（書記言語）を真似始める。その署名を書くことからテキストもどきの波線が現れ、それが絵を補足するようになる。まさしくエクリチュールの開始である。絵とテキストとの違いは、何か。絵は、それ自体で自足し、美等のイメージを創出するが、テキストは、欲求、思考、命令を媒体としてはじめて価値をもつのだという。声や身振り、物まねなど、間接的仲介手段を使って表すことができない時に、人ははじめて書くという必要性を感じるのだというのである。4歳3ヵ月のバルは、デッサンから独立し、やがて個別文字を書き出す。やがて、5歳前になると、書くことには規則があり、真似るべきかたちがあることに気づく。5歳半になると、自分が知っている人の名を記することに熱中したりしながら実験的模索は続く。6歳では、学校に行くのは稀であっても、お手本の素描をしたり、印刷機の周りをウロウロしていることでアルファベットを覚えてしまう。生活を心浮き立つものにする手段としての話し言葉を通じて、子どもは文字の価値、意味、字面に親しんでいく。そして、自らのエクリチュールとお手本を見比べることにより、読解能力を身につけ、7歳3ヵ月には、文章を理解しながらすらすらと読むという爆発現象を迎えることになる。ここで注目すべきは、この文字学習の推進力は、模倣の欲求、社会との結合、表現、交信への欲求であり、生活の富こそが、読み書きの自然な習得を可能にする原資であることである。また、フレネは、伝統的学校のいう読むことから書くことへと発達が進むのではなく、声による思想表現からデッサンをし、それが文字を書くことへと進み、書かれた語や句から思想を理解し固有の読みができるようになるという、書くこと（エクリチュール）から読むこと（レクチュール）へと進むのが、言語の自然な学び方であると言及する。

第2部「包括読みの理想のあり方」（pp.181-220）では、フレネが果敢な思考の持ち主と評するオヴィド・ドクロリイ（1871-1932）の包括的な教育方法を紹介し、学校化されたこの教育方法に対する世の批判に反論を行う。ここでいう包括的とは何か。例えば、子どもが papa という場合、p や a を手がかりにすることはなく、周囲の環境を意識し、その中で生き成長しようとするとき、唇や顎が相応しく動いて発する叫びであり、文字やシラブルや語からではなく全体的な表現として言葉が出てくるのだという。つまり、個人が最初にいだく心象は、ひじょうに包括的で融合的であると分析する。読みの学び方は、全体の脈絡を押さえてからシラブルや語を分析するというのである。その子どもの発達に即した方法が、フレネが、実践の中で生み出した自由テキストという手立てを用い、印刷機を使用し、学校間で通信を行うことであるという。なかでも印刷機を使うことで子どもは、自分の仕事（学習）に目的があり、自分がやっていることはたんなる学校の活動ではなく社会的・人間的な活動であると感じ、いま全力で打ち込むことで、行動し、探求し、創造することへの強烈的な衝動に自由な我が身を委ねていると感ずることができるという。

第3部「文法の自然方式」（pp.221-279）では、言語教育の出発点は、子ども自身の創造行為であり、口語言語も書記言語も実験的模索でしか習得されないと述べている。しかし、自然発生性が万能ではなく、鉛筆を与えれば傑作を生み出すのではない。学習のプロセスを逆転させ、規則や学校を起点に置くのではなく、実践と行動から学習を出発しようと提言する。ここにおいて文法は、不可欠なものではない。

本書は、子どもの言語習得への道筋とそれに沿った言語教育のあり方を主軸に、揺るぎないフレネの思想が述べられている。この思想に基づく学習理論は、言語学習に留まらずあらゆる学習に敷衍する。子どもが何かを学ぶとき、要素と要素を結びつけることから出発するのではなく、事象を包括的で融合的に捉えることから始め、手探りで模索しながらものにしていく。このフレネの洞察に充ちた子ども理解と、積みかけるような持論の推進、そして具体的方策の提示は、示唆に富む。また、翻訳であることを感じさせない里見の自然で滑らかな日本語と漢語をふんだんに用いた的確な表現が、読者の心を最後まで捉え導く。